



金毘羅参りの表玄関 瀬山登と新堀湛甫

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

新 幹線を岡山駅で特急に乗り換えると、十数分で瀬戸大橋に差し掛かった。瀬戸大橋は、車道と鉄道の二重構造となっており、電車は車道の下を通るので、トラスに組まれた鉄骨がやや煩わしいものの、車窓からは瀬戸内海にうかが鳥々が見える。目的地の丸亀まで、飛行機を使わず、船にも乗らず、横浜から四時間ほどで着いてしまう素晴らしさ。初めて通った本四橋は、四国をぐっと身近なものにしたと実感した。

さて、丸亀駅を北口から出ると、歩いて数分で小さな波止場につく。海に向かってコの字に開いたこの波止場は、江戸後期に新堀湛甫と呼ばれた金毘羅参りの海の玄関であり、船を降りた参詣客は、高々とそびえる丸亀城の石垣に感嘆しつつ、金刀比羅宮まで一二キロほど続く丸亀街道を歩いて向かったのだ。しかし、かつての賑わいは「金毘羅千人講」が建立した青銅製の大きな太助燈籠と、その横に座る築港の功労者・瀬山登の銅像のみが伝えるばかりだ。

当時、江戸の庶民に絶大な人気を誇ったのが、金毘羅参りの旅であり、江戸後期には、丸亀の港は船がひしめく有様となった。そこで増築が行われ、文化三（一八〇六）年に福島町の北岸に福島湛甫が造られると、町は大いに賑わいを見せた。これをみた西平山町は、おらが町にも湛甫（港）を造りたいと、丸亀藩に陳情したところ、すでに福島湛甫でもさばき切れない状況にあったので許可は降りた。しかし、藩は財政難であったため、築港と灯台の役目をはたす燈籠の建造費用は、「講」を作って資金を集めることとなり、この組織と運営に尽力したのが瀬山だった。

瀬山は出願した町人の代表を江戸藩邸に集め、金毘羅信仰を利用した「金毘羅千人講」を組織し、江戸商人などを勧誘して五カ年で資金を調える計画を立てた。しかし、これらを実現させるには幕府へいちいち伺いを立て、煩瑣な交渉の矢面に立たねばならず、さらに度重なる付け届けに多額の金銭と神経を費やした。しかも、丸亀藩内部からも、「武士のやるべきことではない」などと計画の反対論さえ出たという。また、講の世話人の間にもトラブルがあるなど、様々な問題が生じ、「計画が成立することの困難さは、天に昇るようなもので、五カ年の間何事も

無く、見込通り成立すれば此の上の仕合せはない」と述べている。こうした苦勞が実を結び、天保四（一八三三）年、東西八〇間（約一四四メートル）、南北四〇間、西側に一五間の出入り口を設けた新堀湛甫が完成した。

瀬山の努力の結晶である新堀湛甫の跡を出発点とし、江戸時代の参詣客になったつもりで、丸亀街道を金刀比羅宮まで歩いてみたいと思う。（つづく）



瀬山登の銅像

[交通] JR丸亀駅より徒歩約3分